

遺3 侍  
2378  
274

往昔鎌倉の執權北條氏世と保つ夏百二十四年就中宗尊卿將軍

時相摸守時頼公康元元年十月廿二日山内最明寺於

飾と落し法名と字了坊道崇と号と時小千歳天下の執權職

と時頼の嫡子幼稚る故重時入道の嫡男武藏守長時預け讓ら

せのひける夫よりて最明寺殿ハ諸國を巡歴して國政と下民と採録

のいける其右宝光寺時宗公の時青砥左門藤綱とらふ人あり其先相

摸園の任人大庭十郎近郷の後胤る近郷兼久の兵乱宇治の儀

と高名あり戦功拔群るしうり義時勸告員して近郷上総園青砥の

壯と興へる是より子孫相續しく青砥と以て苗字とる青砥左門藤

満の末子安腹に生れる幼名孫三郎藤綱是る其性清廉潔白小

て節儉質素と上目とほその賢臣るる夏と最明寺殿明察あり

天下政道の助ると評定衆の座小居る夏と政夏と執の役と蒙とむ

青陽石一



將と北條室光寺時宗最勝園寺貞時二代の相州天下靜謐の世と  
呼れも藤綱理世安民の政道正しく訟と聽及て善政さき非分なく  
民を憐れ私慾と懲一諸民安堵の思ひとあり其支實人口不膾炙せり  
藤綱本者信の心更ふる衣裳の常の質布の直出布の奴袴と穿さ朝  
夕の飯中乾更燒塩の味決して美食珍味と啖む出仕の時不朝卷の  
刀と帶叙爵の后の木太刀の強代衣と着りて其節儉かの証されも親  
族朋友とも會ひ者不室と惜まざる是と救ひ憐む或時藤綱臨時の公事  
て夜陰ふ出仕せし移不其帰る腰付たる燧袋入持る錢十文滑川の橋  
上より落し入る僅の物なる小太き小周章従者不命と統松十把と五十文  
買ふ水の隈々も照一辛じて十文の錢を取得る人愈傳へて十文の後を求  
んとそ五十文の錢の費ま小利大損なりと笑ひける藤綱は廿間の人の心懸る  
るものも國の貨と辨へ費とまひ民と惠むるをなされ我落し錢十

文を速く是と案され水底に沈むと永く人回帰る松明と買ふ  
後五文商人のふ入られ失ふと河を渡る我損る商人の利之世の化  
融通するに至る我もあつた他のふあつたあつた中平文の後いふ失ふ  
度る是天下の利ありやと云われ物難し者舌を巻て感つけしを  
唐宋の代も程子と人十錢の茶を水中に落しと嘆しると同日の論  
る不斯廉直なる藤綱政事と執一刻民の訟と聽一明断数百件陳  
訴霜の旭に解る如く賞罰を盡て其理を稱ひ一占たるの私をこれ奸  
賊も伏しと首と献り罰不冤枉と崇りも白日不禍胎と照せし白美  
の誠勸善懲惡の速る童世家の教諭とありと話柄と輯録して  
春の徒然と尉心る度あり形也

維時弘化丁未之初稿稿成  
同戊申歲新春出梓發市

一筆茶渙公羽誌







密談  
 せし全助あまうまうそ  
 他小漏人ごとを怨れしそふ  
 彼を殺せしとそ欺る小椋  
 夫の爲め自節を断るも  
 父と兄の悪支を併人せし  
 修り親不孝兄不義  
 の罪小椋あり是人倫の  
 変尤甚し絶せざる  
 政道を以て論時日  
 非と決し疑青砥藤網  
 倭漢の例を以て其道理  
 如黒身の淺論明断  
 巻中小妾  
 あるぞり



畔江屋潤平娘  
 奥井家全助妻  
 小椋  
 琴次

忠義の僕奇八  
 古主公龍谷の男  
 司太郎の零落  
 といふなりて其此  
 の負込窮と不顧  
 家財と售妻と  
 賣刺者負の  
 盗とるまんと  
 夜市小云湊され却て  
 賊小黄金百兩と貫得て  
 主人を養ふふ余るふ其金の  
 極印より半露れて奇八も



龍谷 司太郎



奇八の妻 抜衛



上目易

〇大意  
 忠義の僕奇八  
 古主公龍谷の男  
 司太郎の零落  
 といふなりて其此  
 の負込窮と不顧  
 家財と售妻と  
 賣刺者負の  
 盗とるまんと  
 夜市小云湊され却て  
 賊小黄金百兩と貫得て  
 主人を養ふふ余るふ其金の  
 極印より半露れて奇八も



盗賊濱島并兵衛の  
手下 岩淵小僧  
夜市

忠義の僕  
刺烟草賣  
奇八



子の井平拾四人小駄右を長  
草賊ありて有て武家不徳の  
法師とありて諸國を身替り重  
の貨物を取り横行するに傍若  
人ありて民を為ふるに藤洞  
愁所を憐れいしとて賊の栖家  
小渡村十郎五十子七郎と捕  
向ひて濱濱に在る其時都  
小駄右小僧夜市の名に六  
速官舎に居る夫より社を  
の縁細の善政を伏して自願  
証名の首と奉りて強勇力の  
豪傑の首支の巻中を詳あり



青砥左工門廳小許と時  
秋父山強盜極て民の財を掠  
奪る其魁首濱島在兵備  
と自揮名して日本駄右と呼  
る存り其小属者小賊十有餘  
人あり第一位小居し岩  
小僧夜市次天七小僧宝作  
木賃宿の於松の女るとも武  
藝云小年珠の容色うら美  
人の男松といふ支より下甲し守  
猿が餅万右毛頬白小吉龍  
小僧由吉の落番兵半天龍  
小平の月野岡七小猿揮助天  
狗次取射太郎小波逸平鷹  
眼見太郎縮葉小僧興藏田

發端

後念の... 結... 角... 人... 五月... 山...



洪水... 民... 山... 水... 人... 山...

洪水... 民... 山... 水... 人... 山...



Vertical text on the far left edge of the page.

Main body of text on the left page, written in vertical columns.







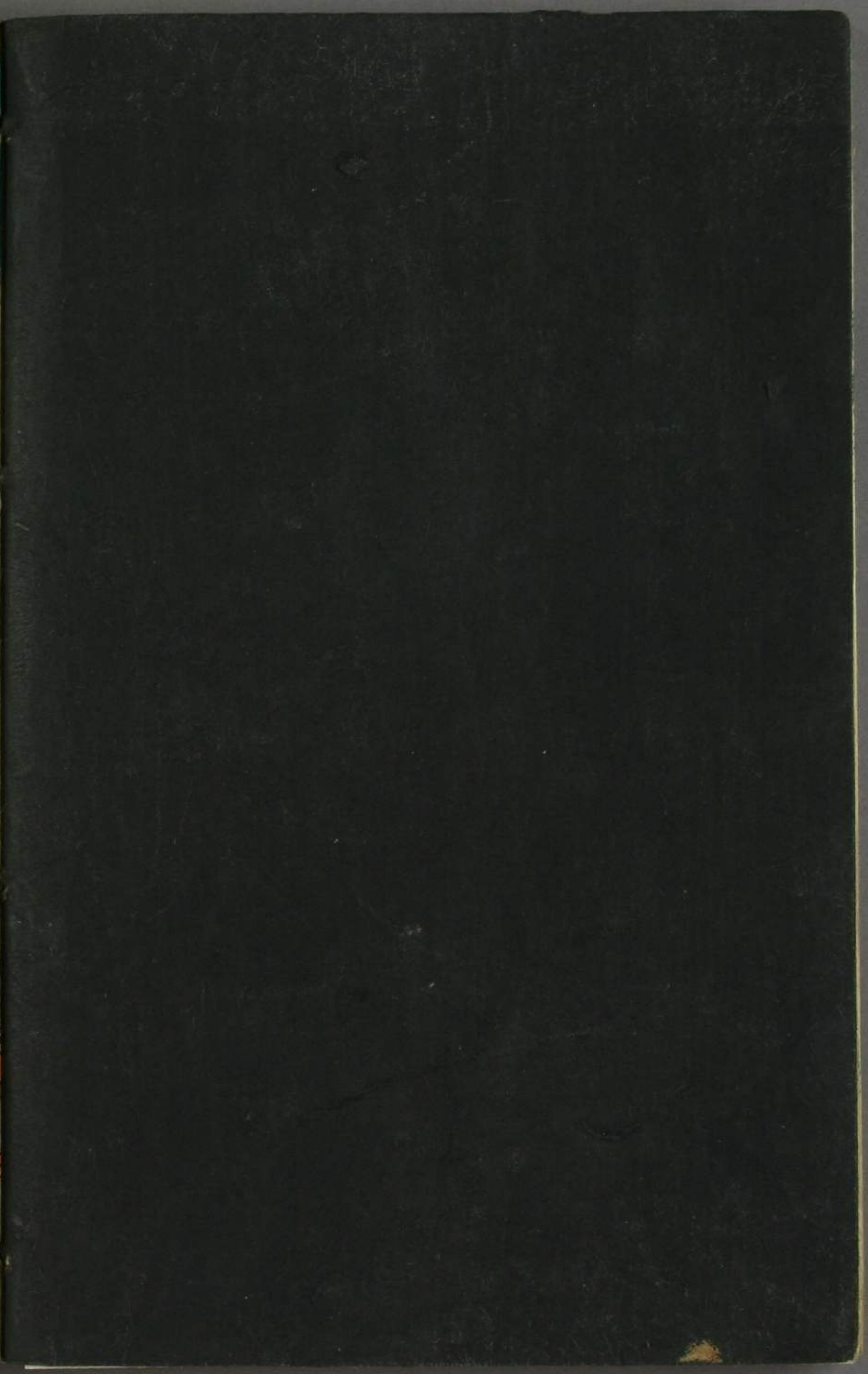


# 豊國画一筆茶作

This illustration depicts a scene from a Japanese woodblock print. Three figures are shown in traditional attire. A central figure stands, flanked by two others who appear to be seated at a small table. On the table, there is a box with the character '刻' (engrave) written on it. The entire scene is framed by dense handwritten text in kuzushiji script, which is a characteristic feature of this style of illustration. The figures are rendered with fine lines and shading, typical of the Edo-period woodblock print aesthetic.



青砥禪

















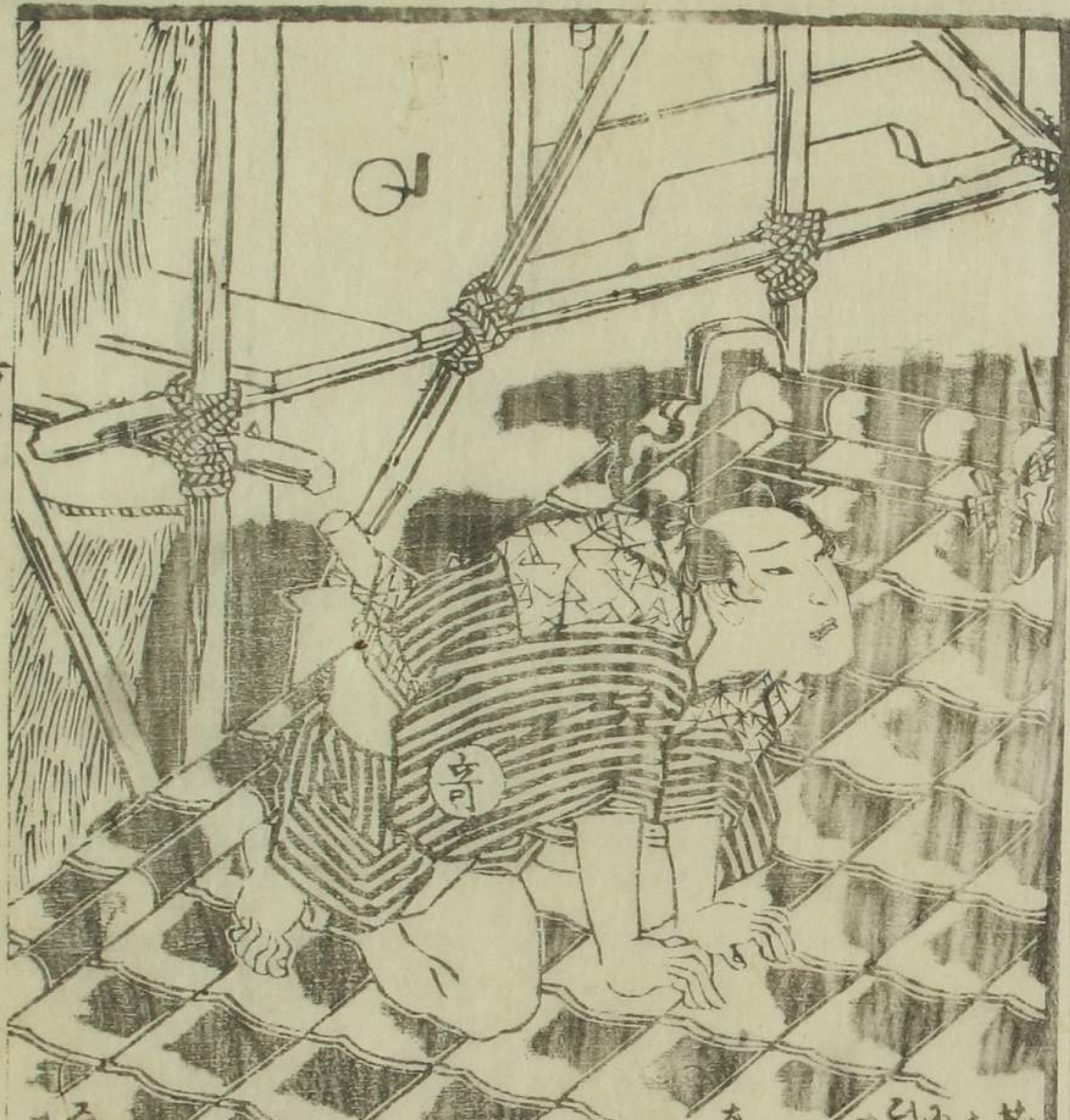




青島一



三月一日



Handwritten Japanese text in vertical columns, likely a narrative or commentary related to the illustration above.

Handwritten vertical text on the left margin of the page.

Small handwritten mark or character on the left margin.



Handwritten Japanese text in vertical columns, likely a narrative or commentary related to the illustration above.

Handwritten vertical text on the right margin of the page.

Handwritten Japanese text in vertical columns at the top of the page, above the illustration.

アタシは昔まことと申すていするのゆゑに  
 わたしのまじりて商人のまじりていするの  
 むねのゆゑに商人のまじりていするの  
 むねのまじりていするの  
 むねのまじりていするの



アタシは昔まことと申すていするのゆゑに  
 わたしのまじりて商人のまじりていするの  
 むねのゆゑに商人のまじりていするの  
 むねのまじりていするの  
 むねのまじりていするの

アタシは昔まことと申すていするのゆゑに  
 わたしのまじりて商人のまじりていするの  
 むねのゆゑに商人のまじりていするの  
 むねのまじりていするの  
 むねのまじりていするの

アタシは昔まことと申すていするのゆゑに  
 わたしのまじりて商人のまじりていするの  
 むねのゆゑに商人のまじりていするの  
 むねのまじりていするの  
 むねのまじりていするの

アタシは昔まことと申すていするのゆゑに  
 わたしのまじりて商人のまじりていするの  
 むねのゆゑに商人のまじりていするの  
 むねのまじりていするの  
 むねのまじりていするの

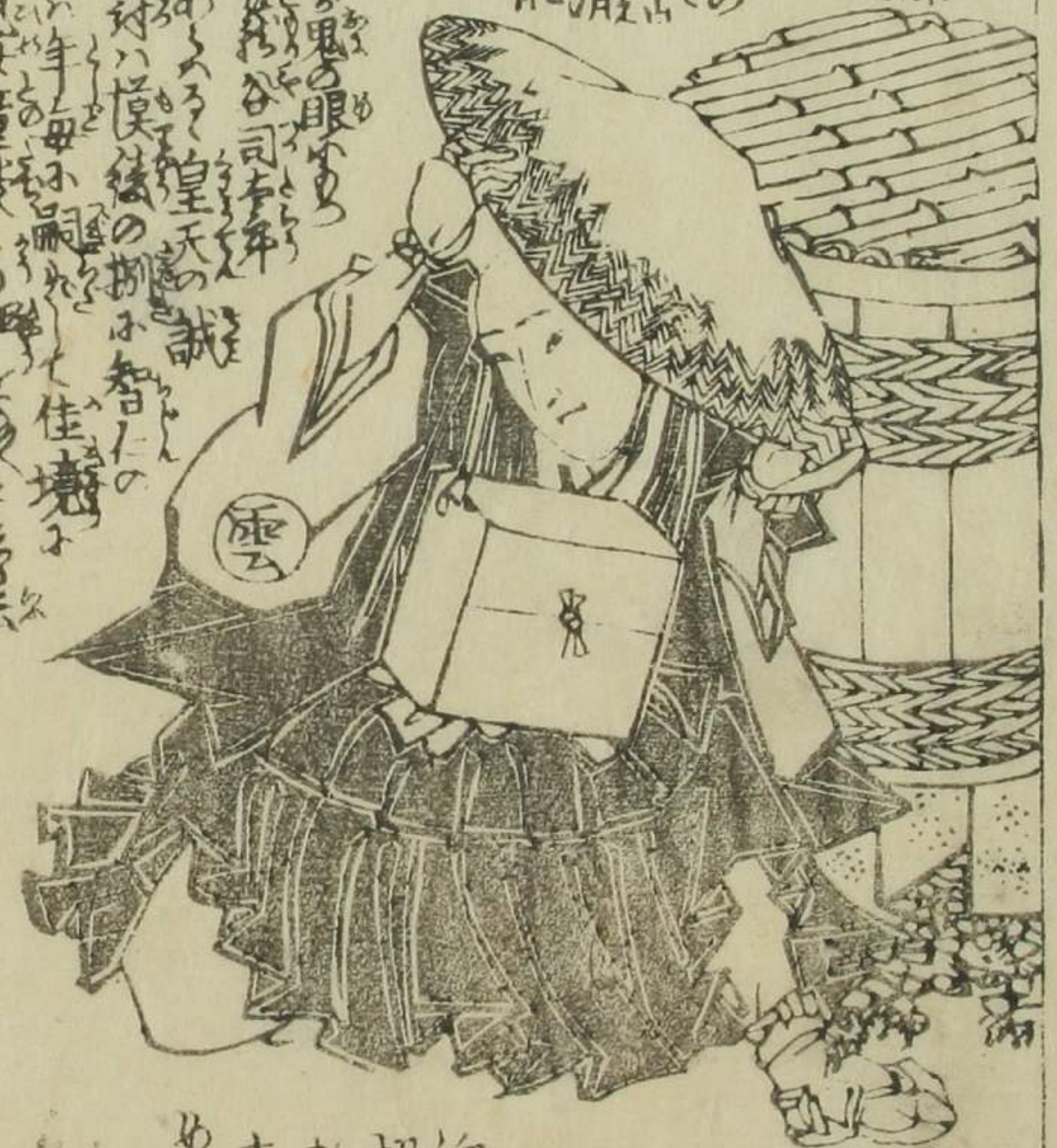


アタシは昔まことと申すていするのゆゑに  
 わたしのまじりて商人のまじりていするの  
 むねのゆゑに商人のまじりていするの  
 むねのまじりていするの  
 むねのまじりていするの

○これより琴次篤子郎の  
孝心事伝とて送るものなり

四郎平の人を色を好まざる  
一筋道に迷ひ横上り故に  
奇心毒小を本家の涙眼  
江屋の宿入の百両の黄  
金を盗み去りて不幸福の  
境忠義の道に負の徳の古  
主の為の計しを相と消  
る罪の此の銷落を主能  
徳の磨あら孝子二名の死  
を争ふ其本人の路をての  
強盗の京より岩瀬小僧の眼あり  
涙雨のぬきたるを流すの  
が余命の依りて忠孝世に  
御断の身と下孝の賞罰の  
明断のとあかやうなる物  
至るまで小まふあり其の  
見女童輩も

豊國画一筆茶作



備書 谷金川  
迎慶 招福 新春 喜賀

とて所

食本屋

飯八





